

[事業報告]

地域社会学におけるフィールドワーク実施報告

中村 洋

山陽小野田市立山口東京理科大学 共通教育センター

Fieldwork Implementation Report in Community Sociology

Hiroshi NAKAMURA

Center for Liberal Arts and Sciences, Sanyo-Onoda City University

要 約

本学工学部2年生を対象に開講されている「地域社会学」は、学生が山陽小野田市内でフィールドワークを行い（地域に出て調査を行い）、自分が集めたデータを統計的に分析し、課題の解決方法を考える授業である。2019年度は山陽オートレース場、子育て総合支援センター（スマイルキッズ）、きららガラス未来館でフィールドワークを行い、自らが収集したデータを統計的に分析し、課題の解決方法をフィールドワーク先に提案した。

Keywords : Statistical analysis, Regional understanding, Solving regional difficulties.

キーワード : 統計分析、地域理解、地域課題解決

1. 地域社会学の概要

本学工学部2年生を対象に開講されている「地域社会学」は、学生が山陽小野田市内でフィールドワークを行い（地域に出て調査を行い）、自分が集めたデータを統計的に分析し、地域課題の解決方法を考える授業である。以下に「地域社会学」で行ったフィールドワークの概要と、自らが収集したデータを統計的に分析した結果から考えた課題解決策を概観する。

2. フィールドワークの概要

山陽小野田市役所の協力でフィールドワークを受け入れてくれることになった、スマイルキッズ（山陽小野田市子育て総合支援センター）、山陽オートレース場、きららガラス未来館を、2019年9月21日（土）に、受講生15名と担当教員が訪問した。現場に行き、現物を見ながら、責任者から施設の概要や課題について説明を受けることで、施設への理解を深め、何のために、どのような調査をするかを考えるために必要な情報を収集した。

その後、学内で調査計画を立案し、調査票を作成した。スマイルキッズでは、子育て世代が継続的にスマイルキッズを利用するために求められるサービスを明らかにするための調査票を作成した。さらに利用者が子育て総合支援センター（スマイルキッズ）と、地域子育て支援センターとを、どのように使い分けしているかを明らかにするための調査票も作成した。山陽オートレース場では、既存利用者の利用頻度を増やす方法や、新しい利用者を増やす方法を、きららガラス未来館では、大学生世代の利用を増やす方法を明らかにするために調査票を作成した。

作成した調査票を用いてフィールドワーク先の来訪者に対して調査を行った。調査は学生から来訪者に調査依頼を行い、了解を得られた後に調査票を渡し、来訪者に記入してもらい、その場で回収した。

スマイルキッズについては、7名の学生が2019年11月2日（土）、同11月9日（土）、同11月15日（金）に手分けして調査を行い、合わせて45名から回答を得た（調査への協力を依頼した全員から回答を得た）。さくら保育園地域子育て支援センター“ほっぺくらぶ”を、2019年11月20日に訪問し、子育て支援センター間の使い分けについて、ほっぺくらぶのスタッフに対して聞き取り調査を行った。12月上旬にほっぺくらぶに調査票を置いてもらい、来訪者に回答してもらった。

ほっぺくらぶ利用者30名から回答を得た（スマイルキッズが子育て総合支援センターであり、さくら保育園にあるのが、地域子育て支援センターである）。山陽オートレース場は4名の学生が担当し、2019年11月9日（土）に調査を行い、28名から回答を得た（調査への協力依頼は39名に行ったことから、回答率は72%であった）。きららガラス未来館は4名の学生が担当し、2019年11月23日（土）に調査を行い、25名から回答を得た（調査への協力を依頼した全員から回答を得た）。若者のきららガラス未来館の利用者数を増やす方法を考えるために、本学工学部の学生に対して調査を行った。学生が結城先生、穂本先生に相談し、両先生の了解を得て、授業後に調査を行い、合わせて87名から回答を得た。



スマイルキッズでの調査風景

3. 学生が考えた課題解決策

学生がフィールドワークで得られたデータを統計的に分析し、フィールドワーク先の課題解決方法を考察し、学生からフィールドワーク先に報告した。報告は2020年1月30日（木）に本学内で行われ、地域社会学を履修する学生15名（工学部の2年生）、フィールドワークを行った3か所それぞれの施設長が出席した（山陽オートからは桶谷一博氏（山陽小野田市経済部公営競技事務所 所長）、スマイルキッズからは赤間昌子氏（山陽小野田市福祉部子育て支援課 スマイルキッズ（子育て総合支援センター）センター長）、きららガラス未来館からは湯城明彦氏（富士商グループホールディングス 資産活用本部 経営企画部 地域開発室 室長兼 きららガラス未来館 館長））。

きららガラス未来館については、若者の利用者を増やしたいという施設が有する課題に対して、学内で

行った調査結果の分析に基づき、動画を用いた広報を行うことや、地域の歴史や自然の学習と組み合わせた広報を行うことで、大学生の来訪者が増えるのではないかと提案が行われた。学生のきららガラス未来館の認知度が低いこと、それを改善するために、学生がよく遊びに行く場所を分析した結果から明らかになった学生がよく行く場所において広報を行えば、大学生の認知度も高まるのではないかと提案が行われた。湯城館長からは、動画を使用した広報は関心があり、参考にしたいというコメントがあった。



きららガラス未来館での調査風景

山陽オートについては、既存利用者の利用頻度を増やす方法と新しい利用者を増やす方法を検討した。既存利用者の施設への満足度が高いと利用頻度が増えやすいという分析結果に基づき、分かりやすい施設案内を利用者に対して行うことで、利用頻度が上がるのではないかと提案がなされた。バスを利用して山陽オートに来ている人の利用頻度が減っているという分析結果から、無料バスを運行させることにより、利用頻度が増えるのではないかと提案もあった。新規利用者を増やすアイデアとしては、週末の開催の有効度が高いという分析結果が報告された。桶谷所長からは、山陽オートでの調査は大変だったのでご苦労されただろうという感想とともに、山陽オートの地域における位置づけ、バスの利用など詳細なコメントが学生に返された。週末開催についても、利用者が収入を得る日（例えば年金の支給日）に合わせて開催するといった工夫を行っていることが紹介された。

スマイルキッズについては、利用者を増やす方法を考察した。近場の人が利用しやすいという分析結果から、利用者を増やすためには、市全域ではなく、近隣での広報に力を入れてはどうか、という提案がなされた。スマイルキッズの特徴である食育に関するイベントは、分析結果から保護者のニーズが高いことが分かった。今後、食育で扱う分野の拡大や食育イベント

の頻度を増やしてはどうか、という提案がなされた。子育て総合支援センターであるスマイルキッズと、地域子育て支援センターであるほっぺくらぶとの利用者の使い分けについては、ほっぺくらぶは低年齢の子どもが利用し、スマイルキッズは高年齢の子どもが利用しているという使い分けがなされていることが分かった。ほっぺくらぶでは、年齢別に利用できる日が定められているため、低年齢の子どもが安心して遊べるためであった。ほっぺくらぶは認知度が低いことが分かったため、ほっぺくらぶについても、市の広報誌で積極的に広報してはどうかという提案がなされた。赤間センター長からは、現在市外の利用者が増え、市内の利用者が不便に感じることがないようにしていること、食育のイベントに関しても市内を優先するようにしていることについて説明があった。

4. 学生の感想

学生のフィールドワークに関する感想として、調査のために声かけるのは緊張した、調査に協力してもらった工夫が大変だったが良い経験になった、という声が聞かれた。現場に行くことで、分かることが多かった、地域社会への理解が深まったという感想もあった。フィールドワークを行い、現場に行って、現物を見て、現実を知ることができ、山陽小野田市への理解が深まったことが推測された。

フィールドワーク後に統計的な分析を行い、課題の解決策を検討し、フィールドワーク先への報告を終えた後の感想としては、自ら調査をして、統計処理をして、解決策を考える方法を知ることができて良かった、分析に取り組む中で様々な価値観があることへの思いが至るようになった、という声があった。統計処理についても、一見関係がなさそうなところにも関係を見い出せて面白いと感じた、という感想もあった。